「オゾン層・紫外線の年のまとめ（2013年）」の概要

【オゾン層の状況】

○世界のオゾン層

・南極大陸のほとんどの領域で、年平均オゾン全量は参照値（1997～2006年の累年平均値）より10％以上多く、一部は15％以上だった。→本文3ページ参照

・南緯60度～北緯60度で平均した月平均オゾン量は、全般的に参照値（1997～2006年の累年平均値）より少ない状態が続いた。→本文3、6ページ参照

・世界全体のオゾン全量は、1990年代後半以降はほとんど変化がないかわずかな増加がみられるが、1979年以前より少ない状態が続いている。→本文7～8ページ参照

○日本上空のオゾン層

・日本上空の月平均オゾン全量は、国内4地点（札幌、つくば、那覇、南鳥島）とも参照値（1994～2008年の累年平均値）より多いか同程度となる月が多かった。→本文11ページ参照

・日本上空のオゾン全量は、1990年代半ば以降、国内4地点（札幌、つくば、那覇、南鳥島）で緩やかな増加傾向がみられる。→本文13ページ参照

○南極オゾンホール

・南極オゾンホールの年最大値は過去10年の平均と同程度だった。→本文19ページ参照

【紫外線の状況】

○国内の紫外線

・国内の紅斑紫外線量日積算値の月平均値は、国内3地点（札幌、つくば、那覇）で、参照値（1994～2008年の累年平均値）より多いか同程度となる月が多かった。→本文32ページ参照

・紅斑紫外線量の年積算値の経年変化では、札幌とつくばで増加傾向がみられる。これは天候やエーロゾル量の変化が原因として考えられる。→本文33ページ参照

○南極域における紫外線

・南極昭和基地の紅斑紫外線量日積算値の月平均値は、9～12月に参照値（1994～2008年の累年平均値）と同程度か少なかった。→本文35ページ参照